

アメリカニズムと現代アメリカの階級 —中野耕太郎『戦争のるつぼ』を読む—

立林 奈々子

目次

はじめに

1. 本書の構成と内容

2. ナショナル・エリートとローカル・エリートの協同と相克

3. 市民と階級

おわりに

はじめに

第一次世界大戦が勃発した 1914 年当時のアメリカ合衆国は、19 世紀末以来続いていた国内の夥しい変化によって激しい動揺を経験していた¹。科学技術の発展による工業化は、合衆国経済を商業的農業から都市市場を中心とするものへと変容させ、アメリカ社会にかつてない豊かさをもたらした。消費のあり方も大きく変わり、新しい娯楽が人々を惹きつけた。大量消費社会の時代が到来したのである。しかし、その華やかさを支えたのは、南・東欧からの大量の移民や新たに職を求めて農村からやってきた不熟練労働者による低賃金労働であった。都市はそのような雑多な移民や貧しい者を急速に引き寄せ、貧困や犯罪、疫病といった問題をアメリカ社会に突きつけた。このような生活様式や国内の人口構成に関わる変容は、従来アメリカ人が尊んできた価値観の数々を揺るがし、アメリカという国のあるべき姿やアメリカ国民の定義の再考を合衆国に迫ることとなった。

こうして不確かになった事柄に答えを与え、国家が進むべき道を示そうとしたのが、20 世紀転換期の合衆国で隆盛となった革新主義と呼ばれる政治思潮および改革運動であった。革新主義は、まさに当時の合衆国や西洋社会を席卷していた近代化のうねりから生じた時代の落とし子とも言える思想であり、「科学的合理的な方法によれば社会の問題を解決し正義が実現するという、科学万能ともいえる考え方」²だった。科学や専門性といった知

を武器として 20 世紀アメリカの実質的な導き手となったのは、この革新主義者たちだったのである。

本稿が扱う中野耕太郎『戦争のるつぼ 第一次世界大戦とアメリカニズム』(人文書院、2013 年)も革新主義が現代アメリカの礎を築いたという考え方に則りつつ、第一次世界大戦におけるアメリカ・ナショナリズムの興隆こそが「煮えたぎるるつぼ」となって、国民形成を可能にしたことを論じる。著者は、近現代の合衆国における国民形成史の研究を重ねてきており、現在は大阪大学で教鞭をとっている。著者は初の単著となる本書を通じて、自身の長年の問い—現代の起点は第一次世界大戦に見出すことができるのではないかと—に答えようとする。簡潔にして明快な叙述でありながら具体的な資料にも事欠かない本書は、アメリカ史研究に携わる者だけでなく広く歴史研究者の関心を惹くものであろう。

本稿では、3 つの章を通じて本書を論ずることとする。第 1 章では、本書の構成と内容を概観し、本書の主要な議論を明らかにする。革新主義の近代合理主義の理念によって構想された国家秩序は、地方自治体の現実においてどのように具現化されていくのか。第 2 章では、アメリカ国民の理想が第一次大戦を通じて、連邦と地方という 2 つの次元に存在するエリート層の相互作用によって鑄出されたという点に着目しつつ、本書の意義を評価したい。第 3 章では前章の議論を踏まえ、本書ではあまり語られることのなかった下層階級の白人に注目し、彼らがアメリカ国民に包摂されたことの意味を考察したい。それにより、過去 1 世紀の合衆国の支配的権力のあり方と第一次大戦の大義名分でもあった民主主義の内実の一面を知ることが可能になろう。

1. 本書の構成と内容

本書は、第 1 章から第 4 章に「はじめに」と「おわりに」を加えた以下のような構成をとっている

¹ 有賀夏紀『アメリカの 20 世紀 (上) —1890～1945 年』(中央公論新社、2002 年)、4、6、15-16 頁。

² 同上、5 頁。

(節題省略)。

はじめに ―第一次世界大戦とアメリカニズム

第1章 アメリカ参戦のコンテクスト

第2章 「被治者の合意」と総力戦

第3章 アメリカ化の戦争

第4章 総力戦と人種問題

おわりに

「はじめに」において著者は、ウッドロー・ウィルソン大統領が行なった「参戦教書」演説を引き合いに出し、合衆国が第一次大戦を「民主主義のための戦争」、すなわち理念の戦争としたことを明らかにする。ウィルソンによれば、国際社会の協調的平和およびその前提となる「被治者の合意」原則に則った各国内政の改革の推進は、合衆国にこそ相応しい任務であった。このウィルソンのレトリックは、民主主義や自由、平等といった合衆国の独立期の記憶に訴えかける理念中心型のナショナリズム³を喚起するものであった。「参戦教書」は、国民形成が戦争目的の一部であることを示唆しており、国民統合にとってアメリカニズムほど重要な役割を果たすものはなかった。他方でアメリカニズムの理念は、合衆国内の多様な社会集団に「自己の求める民主的社会像を正当に要求する機会」⁴をも与えた。本書は、このような戦時アメリカニズムの熱く沸き立ったるつぼはどのようなアメリカを鑄出そうとしていたのか、を問いとする。

第1章では、1914年から1917年の中立期に、2つの極を為す革新主義思想が国家のあり方をめぐって衝突するなかから、参戦に至るコンテクストが形成されていった過程が描かれる。著者によれば、革新主義思想とは「急激な工業化・都市化に由来する様々な社会問題〔…〕に中産階級的な感性からメスを入れようとする広範な思潮」である。革新主義改革者たちは、「経済の自由放任と過度の

個人主義が、本来、アメリカ的生活に存在したはずの共同性を棄損しているという危機意識を共有しており、「人々の間に社会的な絆を再生」することを目指した⁵。しかし、この命題に対しては2つのアプローチが存在し、2派の分裂は、欧州での戦争という外圧を受けて顕在化することとなったと著者は議論を展開する。

2つの革新主義的アプローチの一方は、コミュニティ再建を主眼とし、とりわけ移民や労働者階級の生活水準を向上させることで、真つ当なアメリカ市民としての包摂を可能にしようと試みる運動であった。セツルメントハウスの設立に貢献したジェーン・アダムズに代表されるこの運動は、草の根の地域ボランティアを中心に成り立っており、移民の集合アイデンティティに寛容であった点を特徴とする。

それに対し、革新主義の第2の系譜は、社会改革は連邦政府が主導すべきものと位置づけた。この考えでは、徹底した経済規制や社会統制に加えて国家への忠誠や義務の感覚を民衆に涵養することが重要だった。セオドア・ローズベルト元大統領がこの考えを推進するにあたって「ニュー・ナショナリズム」という合言葉を用いたことに象徴されるように、こうした革新主義の思想は愛国主義に限りなく近い国民形成を構想するものであった。第一次大戦勃発後には、このなかでも一際右傾化した一派によって「戦備運動」と呼ばれる政治運動が展開されていく。戦備派は、軍国化や義務兵役論を唱え、それが「アメリカの若者に、共通の価値観を植え付け、彼らを文化的に均質な同国人にする」⁶ことを疑わなかった。草の根革新主義とは対照的に、戦備運動は、「ハイフン付きアメリカ人」が旧世界の文化を捨てて「アメリカ化」することを迫った。

1913年から合衆国大統領を務めたウィルソンは、この2つの革新主義勢力とのバランスを探りながら政権運営を担っていくこととなる。彼は政権1期目には、広く民衆の間に存在する戦争忌避感情に配慮し中立を維持しつつ、革新主義2派の攻防戦を慎重に見守った。「ニュー・フリーダム」

³ 本書、10頁。これをアメリカニズムという。但し、これらの理念を国民統合の象徴として確立したのはエイブラハム・リンカーンによるゲティスバーグ演説であった。このことについては、ゲリー・ウィルズ（北沢栄訳）『リンカーンの3分間―ゲティスバーグ演説の謎』（共同通信社、1995年）を参照。

⁴ 本書、12頁。

⁵ 本書、21頁。

⁶ 本書、25頁。元陸軍参謀総長レナード・ウッドは、義務兵役は「るつぼを熱くする」ことだと述べたという。

を唱えたウィルソンは、元来「ニュー・ナショナリズム」派とは思を異にしていた。しかし、国粋主義的な思想がリベラル派を凌駕していくと、草の根革新主義のコスモポリタンな協調的国際主義⁷を戦後構想として採り入れながらも、ローズベルトの愛国政策を奪い取る形で参戦に踏み切り、選抜徴兵制の実施を宣言した。

ウィルソンは、モンロー・ドクトリンという「両義的なレトリック」を利用し、更には上院議会で行なった「勝利なき平和」演説を通じて、2つの対抗的な革新主義思想を繋ぎ、世論の統合に成功したと著者は論じる⁸。「勝利なき平和」演説では、諸国内政において「被治者の合意」原則が徹底されるよう主張し、そのような「アメリカの原則であると同時に〔…〕人類の原則である」理念を基盤とした国際規範を確立する必要を強調した。この演説は広範な革新主義者の心を捉え、草の根革新主義運動に携わり、反戦運動に従事していた改革者たちまでもが、「社会的紐帯の再建の機会として戦争を積極的に評価する」考えへと転向する契機となった⁹。国内に人種差別などの矛盾を抱えたままであるにもかかわらず、革新主義者たちがウィルソンの理念の戦争を称賛することができたのは、感情的なナショナリズムの盛り上がりがあったからこそであったと著者は指摘する。

第2章では、連邦政府による国民動員が戦時広報と選抜徴兵制度の2点から検証される。著者によれば、「被治者の合意」原則を掲げつつ、総力戦を戦うという矛盾を乗り越えるため、戦時政府は徹底的な統制と効率化を行ないつつも国家的強制の側面を可能な限り隠蔽する戦略を模索した。ウィルソン政権が特に留意したのは、「説得のプロセ

スを重視した世論形成を行なうこと」と「地域コミュニティや民間の任意団体の主体的な戦争協力を喚起すること」という2点である¹⁰。国内戦線を牽引した最も重要な機関である国防会議は、産業・労働界の有識者や革新主義者の「自主的」協力を仰ぎ、著しく地域に分散した運営方針を有した。各州に設置された州防衛会議には大きなイニシアティブが与えられ、州内の有力者が戦時広報や徴兵制に関わる実質的な活動の管理や州内秩序維持のための自警活動の組織を主導した。連邦政府は「民主主義の戦争」の国内戦線が国内の隅々にまで行き渡る自発的協力のシステムによって形成されるよう腐心したのである。これによって、「従来の公と私、連邦と地域、社会と国家の境界が融解し、専門家の社会統制と民主的意思決定〔…〕の区別が意味を失っていった」¹¹。

また、「人民の戦争」を戦おうとするウィルソン政権にとって、軍事的検閲によらない世論・情報管理は深刻な課題であったことに著者は注目する。連邦政府は新たに設置した半民半官の組織である戦時広報委員（CPI）にその役割を任せ、CPIは戦争目的を周知・解説し、ナショナリズムを鼓吹するために大量の情報発信を行なった。CPIが全米に流布したイデオロギーには、『被治者の合意』を神聖視しつつも、国民国家の一体性を自明と考え、国家への奉仕と義務を強調する権威主義的なナショナリズムが見られた。著者によれば、「この民主主義と国家主義の不思議な同棲は、その声が市井のアメリカ民衆から発せられたという事実によって辛うじて成立して」いた¹²。「地域の人々の声」による宣伝活動は、フォーミニットマン運動を通じてなされた。フォーミニットマンとは、全米の各地域で選ばれた一般ボランティアが近所の映画館で4分間の愛国演説を行なうものである。演説は多様な言語で行なわれ、エスニックなルーツを持つ下層中産階級の民衆も多くこの運動に参加した。しかし、演説の内容は中央政府によって完全に統制されており、フォーミニットマンになるには当該地域の「3名の傑出した市民」の推薦を受けねばならないという条件があった。CPIの

⁷ J・アダムズらが推進した、国内のリベラルな社会改革と相互依存的な国際協調主義を結びつける考えを指す。本書、27-28頁。

⁸ モンロー・ドクトリンは元来、西半球と欧州諸国の相互不干渉を謳ったものであった。しかし、合衆国が帝国主義列強として中米・カリブ海への介入を強める過程で、T・ローズベルトは、それを合衆国が中米・カリブ海地域に対して国際警察力を持つことを認めるものと再解釈した。ウィルソンは、対中米・カリブ海政策についてはローズベルトの路線を基本的に引き継ぎ、合衆国の西半球における支配的地位を維持するために、人類普遍の理想たる民主主義を謳うモンロー・ドクトリンの領域を世界規模に一般化するという主張を行なった。本書、28-29、36-41頁。

⁹ 本書、42-43頁。

¹⁰ 本書、46頁。

¹¹ 本書、53頁。

¹² 本書、59頁。

主導によって進められた精神動員の過程では、中央政府対地域社会、専門家エリート対一般民衆、国家主義的革新主義対コミュニタリアンの社会思想といったように様々な勢力や思想がせめぎ合っていたと著者は指摘する。

そして、そのようなせめぎ合いは、徴兵問題でも顕在化したという。連邦法によって成立した選抜徴兵制度では、人的資源の効率的配置と共に、国民共同体への献身と義務を通じた国民形成が目指された。徴兵制は、民衆を科学的に選別するという名目の下、「家族関係、経済的地位、人種的属性によって分類、隔離」し、その過程で浮かび上がってくる理想的アメリカ国民像を人々に強いることとなったのである。加えて、徴兵制の実施的な実施過程では地域社会に大きな権限が移譲され、州国防会議やフォーミニットマン運動と同様に、地域社会のエリートが地域徴兵委員となり支配的権力を握ったことを著者は指摘する。そのため選抜徴兵の結果は、各共同体の「有産既婚白人男性が重んじる社会秩序・文化的価値を反映」するものとなる。地域の名望家にとって戦争協力とは「共同体内で保持していた権力や威信を国家の傘下で増大する機会」だったのであり、選抜徴兵制は、「民間の慣習や不合理な感情が、戦争動員を通じて国家的な何かに浸透していくこと」を促した¹³。

第3章では、革新主義の一大テーマであり、主要な戦争目的に引き継がれたと著者が論ずる移民のアメリカ化の問題が取り上げられる。戦時のアメリカ化の3つの特色は、①19世紀末から急増していた南欧・東欧移民は第一次大戦と関係が深く、彼らの祖国ナショナリズムの隆盛が「被治者の合意」原則を謳う合衆国への忠誠と重ねられていった点、②公権力が積極的にアメリカ化を推進し、移民コミュニティと緊密な連携をとった点、③移民の多くが兵士として合衆国の軍隊を経験し、アメリカ的文化や規範にふれた点である。本書の結論を先取りすれば、第一次大戦期のアメリカ化を通じて、南・東欧移民は一定程度アメリカ国民に包摂された。しかし、著者は移民が自発的に戦争に参加したことでアメリカ化を果たしたという主張には懐疑的である。何故なら、チェコやポーランド、ドイツからの移民の若者たちはそれぞれに

共同体の圧力を受け、米兵となるほか選択肢を持たなかった。また、戦時アメリカ化政策では、戦前のセツルメント運動などと異なり、文化同化政策が主流となり、移民の社会的平等や福祉政策の問題は議論に上らなくなっていたからである。但し、国家主導のアメリカ化や軍隊におけるそれが、最終的には移民の士気向上を理由として、移民の言語やソシアビリティをある程度認めた多元主義的国民形成の戦略をとった点は忘れるべきではないと著者は主張する。

第4章では、前章で見た欧州移民の国民への包摂とは対照的に、「有色人種」が大戦を通じて益々排除の対象となっていく過程を考察する。その際、とりわけ黒人の戦争経験に着目する。著者は、それによって国際社会の民主化と合衆国内の改革を結びつけんとするウィルソン主義の根本を検証すると共に、戦後に熾烈さを増す人種暴力や差別の制度化の起源を第一次大戦に見出そうとする。

著者によれば、W.E.デュボイスら黒人指導者が、ウィルソン主義のレトリックを逆手にとり国内の人種関係の改善を期待したにもかかわらず、第一次大戦期における人種問題に関してアメリカ社会が下した結論とは「分離すれども平等」であった。その背景には、総力戦を効率的に戦う上で、黒人（兵）に対する否定的感情という民意に連邦政府や軍当局が配慮せざるを得なかったことや、大量の民間人を軍隊に導入する過程で、民間の論理（南部の理不尽な差別）が軍内へ流入する結果となったことがある。「そうした人種慣行は、いったん軍の中でオーサライズされると、今度は全国規模の公共性を身にまとい、民間社会に還元されて」いった¹⁴。また、草の根的参加やコミュニティの動員を煽った結果、大戦末期から戦後にかけて民間の自警的暴力が増大した。しかし、公的には人種差別の存在は認知されず、人種問題を封じ込めるため、黒人の不満を承知で人種隔離が制度化されていったのである。「すべての人種・民族を溶け合わせてひとつのアメリカ人を創る」というるつばの公的イメージとは裏腹に、アメリカ国民の形成は、「国民のある部分を恒常的に分離し、隔離することを統合の必須条件」としていた¹⁵。ただ、そ

¹³ 本書、73-75頁。

¹⁴ 本書、139頁。

¹⁵ 本書、152頁。

の一方でウィルソン主義のレトリックや黒人兵としての欧州での晴れがましい経験は、黒人たちにとって後に差別的な国民秩序を打ち破る論理や経験となってもいたと著者は論じる。

「おわりに」では、4つの章を通じて明らかになった論点およびそれらの戦後の展開について概観する。第一次世界大戦期に見られた様々な社会の変容や打ち出された理想は、現代アメリカおよび国際社会を規定していくものであり、第二次世界大戦の歴史を振り返るとき、人に既視感覚を与えるのであった。

2. ナショナル・エリートとローカル・エリートの協同と相克

本書の最大の功績は、現代アメリカ国家および国民を形成するにあたり、連邦と地方共同体という2つの次元の支配的な権力の相互作用と、両者がアメリカの民衆に及ぼした異なる影響力とを明らかにしている点だろう。この2つの支配的な権力の存在こそ、実は現代アメリカ国家秩序の特徴であり、近代の合衆国と一線を画する重要なポイントと言える¹⁶。本章では、連邦レベルの支配層と州や地方レベルのエリートが協力、拮抗しつつ、彼らにとって望ましいアメリカ国民像を形成したという点に注目し、本書の意義を考察する。

ロバート・H・ウィービによれば、現代の合衆国には2つの支配的な階級が存在する。地域性に捉われず連邦レベルで制度を定め、国家を動かす支配層であるナショナル・クラスと地方共同体の秩序を重んじ、地方政治の主導権を握るローカル・ミドル・クラスである¹⁷。本書は、この点を具体的な事例を引いて非常に明確に示していると言えよう。例えば、国防会議やCPIといった全国的組織と選抜徴兵制などの連邦制度を通じて国民をコントロールする枠組を構築したのは連邦政府であり、それに協力した革新主義者や専門家であった。それに対して制度の実施過程では、地方共同体の自主性が重視されたために地域ごとのエリートが幅を利かせ、誰を徴兵し、誰をフォーミットマンとするかといった具体的決定を独占的に

行なっていた。こうした両者の結託は、まさに第一次世界大戦という異常事態が「戦争のつぼ」を煮えたぎらせたために可能となったものであった。

もともとナショナル・クラスとローカル・ミドル・クラスは、いずれも南北戦争前から19世紀半ばにかけて、徐々に確立された「中産階級」に起源を持つ¹⁸。ウィービによれば、中産階級の成立の背景には、この時期に合衆国が民主政を自らの政治的・文化的アイデンティティとして受容していったことがある。新しい中産階級の人々は、自治という民主主義の原則を文字通り生きることによって自己に課し、貴族的であることから、支配されることから遠ざかるようとした。彼らは自律的労働に従事する自由な白人男性を市民アイデンティティの中核に据えつつ、階級への帰属を財産の多寡ではなく、より抽象的な概念基準によって決定した。すなわち、自らの立ち居振る舞いや所有物を通じて、自分自身を自己修養に励む礼節 (respectability) ある人物として示すことができるかどうかの問題となったのである。また、「中産階級の人々は、『家庭性のイデオロギー』、すなわち道徳的な家庭生活の特質に関する一連の厳格な考えやきっぱりした意見を自らの階級アイデンティティの中心」¹⁹におき、公的領域で働く男性と家庭を守る妻であり母である女性、というようにジェンダーによる役割分担を重視した。このように中産階級を中心とした新しい合衆国の社会秩序は自律的労働と徳によって規定され、公私を性によって分け隔てられる領域と定める白人男性の価値観を中心とするものであった。ウィービは、この時期の合衆国社会は、自治を行ない民主政に参加

¹⁶ Robert H. Wiebe, *Self-Rule: A Cultural History of American Democracy* (Chicago: The University of Chicago Press, 1995), 141.

¹⁷ *Ibid.*, 141–145.

¹⁸ *Ibid.*, Ch. 3–5. 18世紀中葉から民主政が新たに合衆国のアイデンティティの中枢に据えられ、それによって階級と市民のあり方が変容したことが3章に亘り説明されている。当時確立された中産階級については、次も参照した。クリスチャン・スタンセル「女性、子ども、街の利用—1850年代のニューヨーク市における階級及びジェンダーの対立」、ヴィッキー・L・ルイス&エレン・キャロル・デュボイス編（和泉邦子・勝方恵子・佐々木孝弘・松本悠子訳）『差異に生きる姉妹たち アメリカ女性史における人種・階級・ジェンダー』（世織書房、1997年）、5–7頁；Richard L. Bushman, *The Refinement of America: Persons, Houses, Cities* (New York: Knopf, 1992). 特に第2部 Respectability を参照。

¹⁹ スタンセル「女性、子ども、街の利用」、7頁。

する者とそうでない者との分けることのできる 2 階級社会であったと論じる。

しかし 19 世紀後半になり、社会が都市化・工業化の波に飲まれていく過程で、自己統治のアリーナが拡大し、単一の覇権的階級であった「中産階級」が 2 つに分裂していく。従来の地方的帰属を超越し、新たに形成された全国的ネットワークを活かして合衆国社会を中心からリードする中産階級者が都市に登場した。彼らは、新しい科学こそ平等で信頼のおけるものであるとの考えを得た。そして、訓練を通じて科学的思考を身に着けた少数の専門家が、合理的かつ効率的に多数の福利を実現していくべきだとし、自らに社会改革の使命を課すようになった。それは、誰もが修練によって有徳になれるとした従来の中産階級観とは異なるものであった。そして都市問題や農村の近代化といった改革に自らの「世界観、文化的帰属意識、ジェンダーに関する概念、他の階級に対する偏見」²⁰を反映させ、同時に都市の移民や農村の住民といった「他者」に接するなかで、彼らは都会的で洗練された近代的アイデンティティを固めて行った。こうした人々は、20 世紀初頭までには、共通の価値観と相互に絡み合う全国的組織によって結び付けられ、ナショナル・クラスとしてまとめ上げられていく²¹。彼らこそが本書でも鍵を握る革新主義者なのであり、第一次大戦を連邦レベルで主導したのである。

他方で地方の中産階級者は、19 世紀以来の伝統的な徳に価値を置き続けた。地方共同体の秩序維持を最優先課題とする彼らにとって全国的なネットワークや科学的合理性などはさほど意味を持たなかった。彼らは新しいナショナル・クラスとは異なる価値観、世界観、活動領域を持つローカル・ミドル・クラスとなったのである。彼らにとって、新たに支配的な力を持ち始めたナショナル・クラスは共同体の秩序やコミュニティにおける自身の影響力を脅かす脅威であった。実際に都市のナショナル・クラスは、ローカル・ミドル・クラスが続べる田舎は文化的に偏狭で、生活水準や生活様式の面では後進的だと見なしており、両者は対抗

的な関係にあった²²。

しかし、第一次大戦期には、戦時という特殊状況によって 2 者の衝突が一時的に抑制された。ナショナル・クラスが総力戦を戦うという名目の下、中央集権的な管理体制を強めた一方で、ローカル・ミドル・クラスは地方共同体に一定の権力が移譲されたため、戦争政策への協力を通じて権威を上昇させることができた。著者が説明するように、民衆の協力を必要とした結果、ナショナル・クラスの作り上げた戦争政策の枠組に、様々なローカルの文化や価値観、偏見が流れ込み、それを反映した新しい国家秩序が生み出されたのである。

本書は、特に選抜徴兵制度と戦時広報の仕組みに焦点を当て、この点を明らかにしている。人的資源の計画的確保と効率的配置を意図して設計された合衆国の選抜徴兵制度は、現実には効率性とは無関係な「扶養者としての男性のマスキュリティを柱とする保守的な家族観」や「下層階級を軽視する階級観」といった中産階級の価値観を含み持っていた。ナショナル・クラスは、合理的制度を通じたソーシャル・コントロールによって、民衆を調査・分類・管理する。しかし、そのために無批判に用いられる家族関係や経済的地位といった基準は中産階級の価値観に深く根づいたものであった。このようにナショナル・クラスによって構築された徴兵制度は、実際の分離・隔離の過程で地方共同体に大きな自治権を与えたために、更に『計画的効率』とは無縁な権力政治を生むこととなった。つまり、ローカル・ミドル・クラスのエリート、すなわち「有産既婚白人男性」が重んじる社会秩序や文化的価値が反映されることとなったのである。この選別過程を通じて、「維持されるべき『親密で神聖な家族の関係』」や「地域の経済にとって無用なもの」が支配的権力を有する人々によって再確立された。その結果、多数の敵性外国人兵士や、南部での膨大な数の黒人兵士が存在することとなったのである。本書第 2 章で論じられるように、ローカル・ミドル・クラスにとって徴兵制の実施過程への参加は、連邦のエージェントとなることで、共同体内で保持していた権力や威信を増大する好機だった²³。

²⁰ 同上、7 頁。

²¹ Wiebe, *Self-Rule*, 141-145.

²² *Ibid.*, 142.

²³ 本書、72-74 頁。

同様に、CPI 主導の戦時広報でも「健全な世論」の確保という革新主義の思想に忠実にナショナル・クラスが計画した戦略が全国で共有された。流布される情報は、中央で徹底的に管理されており、ウィルソンが提示した「モンロー・ドクトリンの伝統と将来の平和構築を結びつけるレトリック」などが繰り返し用いられた。この情報を全国のコミュニティで拡散する際に重要な役割を果たしたのが、フォーミニットマンと呼ばれたボランティアの演説であったが、その選出を行なうのは各州の名望家からなる州防衛会議のメンバーか彼らと密接な関係にある者に限られていた。一見、一般民衆の自発的参加の発露と思われるフォーミニットマンは、選抜徴兵制と同様に、ナショナル・クラスによる管理とローカル・ミドル・クラスによる選別を経たものであった。

アメリカ国民の創生を主要な目的として参戦した合衆国は、ナショナル・クラスが合理的かつ効率的な国家の方針を定め、ローカル・ミドル・クラスがそれを通じて共同体の秩序と権力関係を再強化する仕組みを作り上げた。このことは著者が「おわりに」で述べているように、「外部権力がこれに順応するローカルな権力構造を通じて、民衆の日常生活にまで浸透していったこと」を意味している。地域共同体は、『被治者の合意』の名の下に、ますます官僚的支配を受けるという逆説を経験²⁴していくのである。

このような過程を経て、第一次世界大戦のるつぼが鋳出したアメリカ国民とは、著者によれば欧州移民を包摂した多元主義的なものであった。革新主義の最重要課題のひとつであった移民のアメリカ化は、大戦期にも主要なテーマとして引き継がれた。移民の社会的平等や福祉政策に関する議論を行なうリベラルなアメリカ化論は衰退したものの、南・東欧移民の士気向上および自発的戦争協力を促すために、移民の祖国語やソシアビリティに対する寛容な態度が対欧州移民の国策となっていた。しかし、著者は移民の自発的戦争参加のイメージは、戦時政府の喧伝した「被治者の合意」の戦争というイデオロギーと酷似しているとし、この楽観的な移民包摂のストーリーを無批判に受

容することには疑義を差し挟んでいる²⁵。

確かにアフリカ系やアジア系が人種の壁によって主流社会から隔離されていたことは対照的に、欧州系移民は一定の自主性を保持しながらアメリカ国民に包摂された。しかし、実際にはアメリカ国民に包摂されるとは何を意味しているのか。それは、アメリカニズムの理想通りに、積極的に意思決定に参加できる自由で平等な立場を享受することを意味しているのだろうか。次章では、この点について検討し、評者からの問題提起としたい。

3. 市民と階級

現代の合衆国にはナショナル・クラスとローカル・ミドル・クラスという2つの支配的階級が存在するとしたウィービは、合衆国を3階級社会であると定めた。彼によると、2つのエリート階級の下には下層階級^{ロウアー・クラス}が存在する。第一次大戦期は、2つのエリート階級が確立されたと同時に、両者が中産階級のアイデンティティや価値観を維持・強化するため、結託して下層階級を主流社会から排除し、管理しようとした時期でもあった²⁶。

下層階級には、男性中心的な白人中産階級の価値観から外れるとされる様々な人々が含まれる。最も可視的なのは、アフリカ系やアジア系など人種的マイノリティだが、それ以外にも中産階級の家族観を持たない欧州移民や自律的労働に従事していないとされる「産業や農業での自己実現に向いていない者[...]、不熟練労働者」²⁷らが含まれた。世紀転換期の革新主義者がアメリカ化の対象としたのは、まさに下層階級の欧州移民だったのであり、大戦を通じた国民の創生は、主流社会の中心に位置するエリートが均質な中産階級モデルを広く民衆に受容させることを企図したものであった²⁸。

20世紀初頭の合衆国では、下層階級を「差異のイデオロギー」によって主流社会とは相容れない存在として排除する傾向が強まっていた。コミュ

²⁵ 本書、81、106 頁。

²⁶ Wiebe, *Self-Rule*. 3 階級の登場については、pp. 113-116 を参照。支配階級による下層階級の排除については、Ch. 5 を参照。特に、p.130 では第一次大戦期に下層階級の排除が頂点に達したことが説明される。

²⁷ 本書、72 頁。

²⁸ Wiebe, *Self-Rule*, 179.

²⁴ 本書、155-156 頁。

ニティ派の革新主義者を除き、多くの中産階級者は、下層階級と階級を越えた繋がりが持てるとは考えていなかった。合衆国が第一次大戦に参戦するまでに、草の根革新主義は衰退し、戦争は軍隊に見られるような階層制を通じた秩序維持の魅力を強めた。不熟練労働者の集団行動の阻害や、貧者の労働力の搾取、下層階級の精神的劣等の疑似科学による証明などが横行し、下層階級に対する自警的暴力も増大した²⁹。

そのようななかで文化の独自性を認められつつアメリカ国民に包摂された欧州移民の立場は難しいものだった。彼らは白人でありながら、ナショナル・クラスはもちろんローカル・ミドル・クラスの白人中産階級とは異なる存在として社会の周縁に位置づけられた。彼らは、文化的には北部大都市圏を中心に活力を保ち、合衆国の大衆文化の重要な一部を占めるようになっていく³⁰。他方で、職の選択肢は少なく、投票権こそ得たものの実質的な統治や意思決定からも遠ざけられていた。

このような階層制は、ローカル・ミドル・クラスやナショナル・クラスへの参入を試みる者によって益々強化される。下層階級と中産階級の境界上に位置する者は、主流社会に参入するために、自身と下層階級との距離を明確に表明しなければならない。例えば、本書では合衆国の移民社会において、各移民集団の民族団体がアメリカ国家と移民コミュニティのパイプ役となっていたことが説明されている。民族団体の指導者は、合衆国に移民文化の容認や共同体のメンバーの社会や軍での立場改善などを要求する一方で、共同体の成員に対し、祖国ナショナリズムを支える要員として徴兵免除資格を放棄することなどを強制した。戦後、こうした民族団体の指導者たちは共同体内の権力と戦争協力をリソースとして中産階級へと参入する機会を追求し、結果的に下層階級を踏み台として社会的上昇を実現していった³¹。

第一次大戦期に鑄出された合衆国の3階層制は、それ以前の中産階級か否かという2階層制とは異

なり、不平等であるが包摂的であった³²。19世紀に確立された2階級制の下では中産階級の厳しい徳の基準を満たすことであらゆる人が主流社会に参入できたが、3階級制においては、限られた資源しか持たない下層階級にとって階級間の流動性は低くなった。

しかしながら、アメリカニズムの理念は下層階級を無抵抗なままにはしなかった。著者が述べるように、第一次大戦時のアメリカニズムは社会の周縁に追いやられた人々の合衆国に対する期待も大いに押し上げたのである。アフリカ系アメリカ人はこの時期に改めて確認されたアメリカニズムの理想を盾に、市民としての承認を得るため奮闘することとなる。彼らの「被治者の合意」原則の実現を迫る運動は、1930年代に徐々に盛り上がりを見せ始め、60年代の公民権運動でひとつの頂点に達する。同様に、新たにアメリカ国民となった欧州移民たちは、下層階級であってもアメリカニズムの理念を内面化し、自由と平等を享受する自律的な市民として主流社会への参入を目指し、苦闘を重ねてきた。彼らの経験は、白人であってもナショナル・クラスやローカル・ミドル・クラスのそれとはまるで異なるものであり、この点はアメリカ史研究においてより注目されるべきだろう。彼らは人種という障壁を持たなかったために、アメリカ国民への包摂はより容易に達成できたが、個人のアトム化や経済力など不可視の障害によって主流社会への参入を阻まれてきた。しかし彼らは、大衆消費社会の到来と豊かさのなかにあって、たとえ賃金労働者としてでも社会の一端を担っているという自負を培い、エリートの価値観と対峙する「統一的人格」や「単純な真理」といった19世紀の合衆国で重視された伝統的価値観を抛り所としてアメリカ人としてのアイデンティティを形成していった³³。

しかし、白人下層階級の立場は現代アメリカの個人主義的な競争社会では厳しいものであり続けている。勤勉や誠実などの徳が何の報いももたらず、自由に選択できる物事の幅は狭まり、平等

²⁹ *Ibid.*, 127–130.

³⁰ 中野耕太郎「民衆ナショナリズムの願い ―ロバート・H・ウィービーのナショナリズム研究」関西アメリカ史研究会『アメリカ史評論(20)』(2012年12月)、19頁。

³¹ Wiebe, *Self-Rule*, 131–134, 150–154.

³² *Ibid.*, 161.

³³ 横山良「ウィービー史学における民主主義論の展開」『アメリカ史評論(20)』、5頁; Wiebe, *The Opening of American Society: From the Adoption of the Constitution to the Eve of Disunion*, (New York: Vintage, 1984), 381–84.

や被治者の合意といったアメリカニズムの約束が果たされていないという鬱屈した思いが積み重なっている³⁴。こうした白人下層階級の経験を今一度検討し、彼らを主流社会の一員であるかのごとく見過ごすのではなく、社会に正しく位置づけ直すことは、アメリカ史研究の空白を埋め、アメリカニズムやアメリカ民主主義の内実を再考することに繋がるだろう。このことは格差の拡大や下層階級の保守化などが顕在化している現代アメリカを考察するにあたっても必要な1歩であると思われる。

おわりに

本書は、第一次世界大戦が現代の起点であるという主題に基づき、合衆国にとっての大戦の意義を再考するものであった。とりわけ支配的権力の見地からの国民形成の過程は非常に明確に示されており、合衆国の垂直的な現代国家秩序とその成り立ちを明らかにしている。20世紀を通じて連邦政府による中央集権化は一層強化され、ナショナル・クラスが科学的合理性に則り、全国的な制度を築くということが一般化されていく。ローカル・ミドル・クラスは文化的な面において一定の自由を享受し続けるが、進歩的なナショナル・クラスの方針から外れることは次第に難しくなっていく。連邦国家による官僚支配は時代を下るにつれ、益々精緻化されていくのである。それによって連邦と地方のエリートの軋轢が高まり、20世紀後半以降、合衆国社会に深い亀裂が生じ、文化戦争は国内を保守とリベラルの両極へと引き裂いてしまった。

白人下層階級は第二次世界大戦後の豊かな社会に終わりが訪れ、大量消費社会の恩恵を享受できなくなると一層不利な立場に置かれることとなった。様々なエスニシティやジェンダーのマイノリ

ティが独自のアイデンティティと社会における正統な地位を要求する一方で、白人男性としてヘゲモニーの一部であるかのごとく位置づけられた下層階級の労働者や失業者は、敗者の烙印を押されてきた。70年代以降、景気後退と脱工業化が進むなか、かつては労働者としてアイデンティティと自尊心を保持した人々が、市民として社会に参加し、アメリカニズムの理想を実感することが一層困難になっている。

第一次世界大戦が現代の起点であるとするならば、現代アメリカの抱える文化的分極状態や経済格差の拡大といった諸問題の根源もまた、この時期に見出すことができるのではないか。本書は読後、現代を1世紀というより広い視野のなかで再考することを促す刺激的著作である。

(たてばやし ななこ・東京外国語大学大学院博士後期課程)

³⁴ Bruce Springsteen, "Foreword," in Dale Maharidge & Michael S. Williamson, *Someplace like America: Tales from the New Depression Era* (Berkeley & Los Angeles: University of California Press, 2011), ix-x. 白人労働者階級の家庭に育ち、ロック音楽を通じて現代アメリカの理念を追求してきたスプリングスティーンは以下のように語る。「人生を通じて、遵法精神を持ち、正しいことを行なってきた人々が何も得られず、彼らの仕事や犠牲がこの国を作り上げ、彼らの子供達が我々の戦争を戦ってきたにもかかわらず、彼らの人生は周縁化され、遺棄されている」。